

会 議 要 録

会議の名称	令和元年度酒田市文化芸術推進審議会(第3回)
開催日時	令和元年11月4日(月) 午後2時～午後4時
場 所	酒田市総合文化センター412号
出席者	<p>○出席委員</p> <p>中川 幾郎 会長、熊倉 純子 委員、市原 多朗 委員、工藤 幸治 委員、 上松 由美子 委員、田中 章夫 委員、阿部 直善 委員、加藤 聡 委員、 加藤 真知子 委員、白旗 定幸 委員</p> <p>○欠席委員</p> <p>なし</p> <p>○事務局</p> <p>村上教育長 (社会教育文化課)</p> <p>阿部課長、遠田課長補佐、小松補佐兼係長、佐々木主査、土門主査、 中里調整主任、菊池主事</p>
<p>1. 開会(事務局)</p> <p>2. 会長挨拶</p> <p>先日、厚生労働省と文部科学省双方からの依頼で新潟の国民文化祭と障害者文化祭で話をしてきた。そこで印象に残ったのは、障がい者の文化芸術活動促進法という法律が芸術文化をクローズアップするという動きがあるということであった。アートに関わることは基本的人権なのだということが一般化しつつあると私は嬉しく思った。判例地方自治という雑誌に2回連載で私の考えを書いている。絶えず言いたいことは、アーティストで生きるということは職業のひとつであって、その職に就くためにもっとたくさんの子供や若者たちにその機会が供給されないといけな。経済的に貧しい環境からでも、ピアニストとして成長して生きていけるというような社会になってほしいしそうあるべきだと思う。そのために政府や地方公共団体が機会の供給をしていく福祉の芸術政策もあっていいと思う。そのことを大いに主張する機会を与えられて少し安堵している。引き続きこの精神が酒田にもあると思っている。</p> <p>3. 協議</p> <p>(1) 答申書(案)について</p> <p>事務局</p> <p>それでは答申書案ということで資料 1。第 2 回の審議会で皆様から意見をいただき、大きく分けて、1 連携強化、2 専門人材で分けて作成した。まず 1 番の連携強化だが、「酒田市文化芸術推進計画の 20 項目の基本的施策の効果を高めるために市役所内及び市民団体との連携強化に努めること」。本計画の文化的人権を保障する市民文化政策と都市アイデンティの創造を目的とする都市文化政策を複合的に推進することで課題解決を目指してはいるものの、昨年度の事業評価の結果、産業、観光、生涯学習、文化財の活用、市民協働など連携する事業数が僅少であり、今後の連携が課題である実態が明らかになった。このことから社会教育文化課内、酒田市教育委員会内、および産業観光等、部や課を超えた連携、市民との協働を積極的に図ることによって文化芸術のもつ社会的価値を高め効果的な事業の実施ができる、とした。</p>	

2番の専門人材についてであるが、酒田市文化芸術基本条例及び計画に基づき、継続的、戦略的に事業を実施していくため文化行政として市民文化政策、都市文化政策を戦略的に企画立案し運営する能力、条例計画に基づいた各種事業を行うために必要な専門的能力を有する人材の確保、および職員の資質向上に資すること。条例および計画を策定したことは文化行政の基盤作りにおいて重要な意味を持つものである。この基盤を安定的に維持していくためには、行政および財団等において現状や課題を把握し地域にあった施策を企画・立案し、運営できる専門的なノウハウを有する人材の確保が不可欠である。また文化芸術基本法の趣旨等を踏まえると産業、観光、教育、福祉など多様な分野との連携を図ることにより、社会の課題解決に向けた取り組みが可能となることから文化芸術の本質的価値を理解し、どのように生かしていくか効果を見極め、企画しコーディネートしていく人材の確保は極めて重要である。さらにはその専門人材を支え実際に事業を実践する行政職員の資質向上のための環境整備も必要であり、職員の研修システムを確立し、基盤の安定的な維持を目指す必要がある。

以上、1連携強化について、2専門人材についての答申書案を作成させていただいた。よろしくご協議願いたい。

会長

これまでの各委員の意見が万遍なく入っているかとは思いますが、足りないところ等あれば意見を賜りたい。

委員

簡潔にまとまっていると思う。ただ連携強化についてどうしても事業形態が中心部地域に偏っていると前から思っていた。今後は各地域でも高齢者、子育てされている方、子供たちも参加できるような要素も取り上げるべきではないかと思う。専門人材の育成も非常に大事なことで、事業形態がもう少し固まった形で実施されるようになってくると全体を見る総合プロデューサーが必要になってくるのではないかと思う。そういう人材を育てる環境が大事な一要素ではないかと考える。

委員

前回の内容がきちんと入っていると思う。あとはどんな形に広げて繋がっていくかというところを具体的な姿で実践に移していければなど思っている。少し話はずれるかもしれないが、障がい者のアートは人権であるということももっともだが、「障がい者アート展」を取っ払った感覚ができないのかなと思う。つけることで違うレッテルを貼った見方になるのではないか。逆に出すことで理解を得るとい意味合いがあるのかとも思うが。

会長

滋賀県が進めている「アールブリュット」の考えが参考になるかもしれない。アートに関して障がいのあるなしは関係ないという運動で、そういう展示をしている。いかにしてそれを実現できるかが課題。

委員

欠落や不足している面を十分に反省しながらまとめられているので良いのではないかと思う。今年度は事業で学校に足を運び、あるいは市民と行政の間に入って努力をしてきたつもり。だが事業の目標目的がまだ知られていない。何のためにアウトリーチをするのか、マスターコースでなぜ酒田市出身の人を指導しないのかという声があった。市民の期待感にできていないという捉え方をしている方が多くいたので、考え方を伝えるべきだと思った。アウトリーチに参加する生徒が少なく驚いた。参加しない理由は色々考えられるが、熱心に子供たちが向かえるように、あるいは音楽教育を発展・振興させるために工夫した対応策を考えていただきたいと思う。文化芸術に関しては長年各々が蓄積したものがあるし、高齢でもまだまだやりたいというものを持っている方が多いので、そこを大事にしないとこの地域ではうまくいかない。人間としてお互いに信用していかなければならない。答申書案は和して説明責任を果たしていくという内容なのでこれで良いかと思う。

委員

答申書案に関しては特に異論はない。私からいくつか報告したい。今年マスターコースに参加した濱松孝行が奈良のトスティコンクールの1位と日本歌曲賞を取った。テノールの喜納響はベルカント賞を取った。酒田市であるようなチャンスをいただき、自分がこれだけできると確信を持って向かえたおかげで二人ともコンクールで結果が残せたのだと思っている。彼らも私も感謝をしている。テノールの工藤和真は、その後東京音楽コンクールで1位なしの2位を取った。聴衆賞も取った。マスターコースで歌った曲を歌って取った賞であり、本人も私もこんなに嬉しいことはなく感謝している。

悲しいお知らせとしては、若竹ミュージカルの広井隆先生が先月、残念ながら病気でお亡くなりになったこと。オーケストラをずっと支えてきた方だったので、中心を失うような感じにならないか非常に危惧していたが、広井先生が不調なときに代わりに指揮を振っていた田中博さんが指揮者として出演することになったようである。昨日の練習では、広井先生のためにみんなで立派な演奏をしようと言いつつであった。昨日の練習では、広井先生のためにみんなで立派な演奏をしようと言いつつであった。「屋根の上のヴァイオリン弾き」酒田公演は今そんな方向で進んでいる。以上2件の報告をさせていただいた。

目に見えず、数字にも表しにくい文化は、成熟した大人のものであり、子供にはある意味とらえにくい、わかりにくいところがあるが、文化とは、言わば「心の栄養」。むしろ育ち盛りの子供こそがその素晴らしさをするべきだと思う。未だに忘れられないのが、私が中学か高校生の時に加藤千恵先生が目輝かせて、「だっていいじゃない！だって素敵よね！」と言うのを聞いて、ああ先生もこんなに感激するのだな、存在する価値があるのだと思えた。だから先生や行政の方など子供たちにとって偉い人たちが「いいのだよ、これは！」と子供たちにその言葉をかけることがすごく重要なポイントなのではないかと思う。だから進む方向が決まったら、各ポジションで極力そういったことをしていけば子供たちには明るい未来が待っているのではないかと思う。

委員

非常にすっきりしており、答申書の案としては基盤の部分の2項目に絞っていることが個人的には良いのではないかと賛同する。2点の第一歩を踏み出すために欠落しているものを明確にしている面が重要なと思う。今後も審議会で事業を運営していくうえでこの分野が足りない、地域的に足りない、こういう人たちに届いていないとか、そういったことは次の段階でまた評価をしながら、この2点がある程度強化されれば事業がもっと予定通りに進んでいくはずである。すぐに進むかどうかは別として。そうすると指標も建てられるので、思ったより進んでない、進んだなど見えてくる。あれもこれも入れても結局意味のない答申になってしまうので、来年度の審議会で話し合っていけば良いのではないかと皆さんの話を聞いていて感じた。答申に関しては以上。

古いものを大事にしていくのは割と理解が得られやすいかなと思う。「文化は社会の背骨である」と言った偉い人がいるが、文化がないと人間は人間じゃなくなる。では新しく、分かりにくい芸術がなぜ必要なのかと委員方の話を聞いていくつか思った。少しずつ蓄積していったその地域やコミュニティの背骨を築いていくのが文化の役割だとすると、そこに常にカルシウムを供給してその文化を刷新していくのが芸術の役割だと思う。だから芸術がないと文化は劣化していく。そのときに重要なことがいくつかあり、基本計画の中にも「本質的な価値を理解して」とあるのだが、本質的な価値というのは個人にとっての価値だと思う。面白がり方はいろいろで構わない。初めてでも面白がり方が分かれば分からないなりに面白い。分からないものに対する許容度を高めるという役割があるのではないかと思う。

もうひとつは委員がおっしゃった「なぜ酒田市の人に教えないのか」。外に向かって開いた窓としての機能がある。中に閉じこもらずに見たことのない世界と繋がって、酒田で1つステップを踏んだ若い声楽家たちが外で活躍したりしていくのを我がことのように思えるかどうか、21世紀の国際性だと思う。1項目に社会的価値という言葉がある。基本計画の中にもある言葉だが、先ほど委員がおっしゃったように、それを共同体の価値としていくために共有していく。事業の目的や目標を明らかにして、やり方についてみんなで話し合って共有していく。アートの部分は分からなくても良い。個人それぞれがそれぞれの楽しみ方をすれば良い。まして

行政からこれが良いものだとか悪いものだとか言うてはいけない。しかし、それをみんなに伝え、みんなでやっていくというところには明確な分かりやすい言語で共有していく。これがアートマネジメントの部分になる。そこは酒田に限らず全国的にもまだ弱いところだと思う。

委員

答申書の案文について、1項目の2行目に「課題解決を目指しているものである」、その2行下に「今後の連携が課題である実態が」とある。最初で言っている課題解決というのは連携が不足しているということが課題解決なのか。この課題が何なのかがこれだけでは明確ではない。今までの議論の積み重ねからは導き出せるのかもしれないが、そこを具体的に解説するものとして書いたほうが良い。

それから1と2の比較において、例えば4行目で「昨年度の事業評価の結果、産業、観光、生涯学習、文化財の活用、市民協働など」と例示がある。その下のほうでは「産業、観光等」という言葉で区切っている。2つ目のほうには5,6行目のところに「産業、観光、教育、福祉」と一定していないので少し整理したほうが良いと思う。2の「職員の資質向上に資すること」とあるが、人材の育成は行政の段階で新しく人を雇うかどうかも含め非常に大変だが、それをこの審議会の総意とするなら、「資すること」ではなくて「図ること」が相応しい。「企画立案し運営する能力、および条例計画に基づいた各種事業を行うために必要な専門的能力を有する人材の確保、および職員の資質向上に資すること」とあるが、両方とも人材、職員の資質向上なのでここも「図ること」と直したほうが良いと思う。

同じく2番の財団は、現在ある土門拳記念館と酒田市美術館を指しているのか。あるいはそういったものを蓄積していく財団を作っていくという構想なのか。どういう意図でやっていくのかを聞きたい。

最後にずっと前から言っているが、社会教育文化課がこの審議会の意見を踏まえて事業の組み立てをしている姿勢を大変評価している。しかし市役所内部の連携が不足しているということは、社会教育文化課から市全体への働きかけが不足しているからではないか。社会教育文化課から事業の組み立て方も含めてもっと他課へ働きかけをすることで統一的な対応になってくるのではないかと思う。

会長

財団とは何を指しているのか。

事務局

財団に関してはまだ公式に言えない。市長との話の中で、強化を図ることを大前提に酒田市美術館と土門拳記念館を統合して新しい財団を創る方向性で動こうと考えている。財団の屋台骨を強化しようというのが一番の目的。今考えているのはそこまでだが、更にはもう一つ大きくして酒田市全体の文化行政を下支えしていくような財団が創れたらいいのかなと、構想的には思っている。今年度中に議会で勉強会をし、両財団の理事会評議委員会にも話をしていく方向で考えている。

委員

財団の話はとても大切な話だと思う。プラスαのことがあるはず。非常にニュートラルで芸術性の高い人たちが集まった財団が出来るといいなと思う。

委員

赤字1の2行目。「市役所内及び市民団体等との」とあるが、市民団体は「市民」ではダメなのか。団体も根っこは市民なので、根っこを明らかにしてもっと広くしても良いのではないかと思う。基本は個人、社会包摂をふまえた個人である。団体だと少し縛りが入り狭くなるような気がして必要性を疑問視する。答申書に関しては以上。先ほど委員がおっしゃったが、私もアートで障がいのあるなしを区別する必要はなく、代わる素敵な名称が出来れば良いと思う。

委員

答申案には酒田における課題が分かったということを書いているが、あくまでも課題が分かっただけで、どうするのかというところがない。次年度以降どうしていくかという芽生えでも良い。起承転結の結の部分が少しない気がする。それと、委員が来年度から具体的なことが重要になってくるとおっしゃっていたので、全体の核となるイベントをやっていたほうが良いと思う。20項目を統合するようなものを財団などで考え、その中で色々な人たちが参加できることを考えていくのが良いと思う。よって、1,2が芽生えで目的が3。具体的でなくても将来に向けて考え続ける事を加えていただければと思う。

会長

大変貴重なご意見いただいた。委員からは、もう少し機会の均等への配慮についての記述があった方がいいのではないかと。それから障がい者アートの事業面での配慮。私はアーユリブレットはもうきいていると思う。境界をなくし、結果的に障がい者だったというようなやり方を考えたらどうかと思う。委員からは、事業のインパクトやコンセプト、ミッションをもう少し強く市民に理解してもらう必要があるという指摘があった。委員がおっしゃっていたことと繋がってくるのだが、インテグレートして個々をバラバラにやるのではなく春はこれ、秋はこれというようにシリーズ化していく。住民側も協働の委員会もシリーズを担当できるような組み立て方をしたほうがダイナミックに展開できるかもしれないのでそういう事業の組み立て方を示唆してはどうか。学校との連携という点では学校が一番苦しい。授業量も多いのでこれ以上負荷かけないでほしいというのが日本全国の学校の現実である。押し売りではなく、学校が社会教育に何を求めているのか要望をヒアリングやインタビューなどでもっと調査して、次年度以降の施策にプログラミングしていく必要があるのではないかと。こちらから飛び込んでいく姿勢を出すのが良い。委員がおっしゃったが、私もマスターコースの位置づけが市民による市民のための市民自身のという市民自己中毒になってしまっただけは良くないと思っている一人である。この事業は教育的事業でもあるし、名誉市民である市原氏の力を借りて酒田の知名度を高からしめるための戦略事業でもある。酒田から市原氏のようにすごい人が輩出されて、他の街の人もたくさん酒田に来て学んでいるのだと。酒田で学んだので酒田の財産という発想に立たれてはどうか。適塾で学んだ福沢諭吉を大阪の人間が誇りに思っているように市原多朗マスターコースは酒田のものなのだから、そこで学んだ人も酒田のものと思えば良い。その精神を大事にもっと志を大きくしよう。

委員

「名誉市民である市原氏により、現在声楽家として活躍している若手声楽家を招聘し、市民の音楽に対する関心を高めると共に、酒田市内外の音楽による交流を図ると共にプロのレッスンの様子を通して青少年が高い音楽性を目指す動機付けとする。」という立派な狙いがあるのだから、他から言われる謂れはない。意義があるのだから行政から知らしめてもらえば良いという思いを強くした。

会長

その通りだと思う。その一線を守ってプライドを持ち続けることが大事だと思う。それと委員がおっしゃった総合プロデュース事業は、答申のこれまでの欠落を明確にした点が非常に重要だと思う。こうしましょう、ああしましょうではなく欠落を明確にした。

委員

6月の末だったと思うが、会長の代理で私が教育長に諮問書を提出した。その諮問書を読んでもらえていたか。新体制と社会包摂が中核になっていたと思う。

会長

「酒田市教育委員会教育長村上幸太郎、酒田市文化芸術推進審議会に対する諮問について、酒田市文化芸術基本条例第20条第2項に基づき、下記の事項にご審議賜りますようお願いいたします。諮問事項、酒田市文化芸術推進計画に基づく事業の評価について。評価期間平成30年9月から来年8月まで。諮問理由、

酒田市は文化芸術によるまちづくりを推進するため平成30年3月に酒田市文化芸術基本条例を制定し、平成30年2月に策定いたしました酒田市文化芸術推進計画に基づき事業を実施しています。このことから文化芸術施策を推進するため平成30年度4月から令和元年8月まで、実施する事業について貴審議会に諮問するものです。」

これをもとに事業を細かく点検した結果、欠落点や改善点が出てきたということ。合わせて財団も一緒にした方がいいのではないかという意見もでた。これは紛れもなく審議会の中で出てきた話である。委員からも財団についてご意見ございましたし、委員からも財団の統合は良いことではないかとあった。

委員

財団ではなく、そういった何かしらの組織や機構を作って酒田市の文化芸術推進に関することをずっと考えていくぐらいのほうが良いのでは。

会長

教育長と事務局に判断を委ねる。

教育長

財団については2つの話がある。1つは統合の話。もうひとつは造りを頑丈にしていくということだが、事務局からあったように頑丈だけでなく文化を発展させる力を持ち影響力を与える財団になれるかどうかはまた別問題である。今の行政では、統合してその上にもう少し花を咲かせようという議論にはなかなかならない。まず健全な状態にする。私は統合のことは答申に出せないと思う。ただ、統合とは全く別問題で文化や芸術の振興のために一定の役割を果たすことを期待するという趣旨で解釈できる答申であれば、財団を一切書かないということではなくても大丈夫だと思う。今のところは統合という手段を投じながら、目的は文化芸術の振興にあると読み取れる内容になっていれば大丈夫かと思っている。なお検討する。

会長

そのような含みはある。だから財団等においてで止まっている。統合するという意志はここには出ていない。もう一つ、委員から「市民団体等」ではだめだと。

委員

市民の中に市民団体も含まれる。

会長

「市民及び市役所内の連携強化」。市民同士の連携強化という意味も当然入る。市民がつくる団体も包含される。

委員

「市役所内」のところ「行政」ではいけないのか。

委員

まずは目標として明確に市役所内。

会長

市民が出す答申だから「市役所」で良い。委員からの指摘で「職員の資質の向上に資すること」ではなく「職員の資質の向上を図ること」は変えても良いか。1番の課題解決、2行目「課題解決を目指しているものである」とありながら4行目「今後の連携が課題である実態」、2つの課題という言葉を少し整理できないか。

事務局

ご意見を反映させたものを再度作って皆様に確認をしていただき、こちらの確認が終わり次第11月か12月の教育委員会で副会長から答申書を手渡していただくように進めて行きたい。

会長

今回のことに限らず何か助言、意見等あれば。

委員

我々の組織以外をサポートする人材が極めて少ない。もっと市民から注目されて、参画して新しい酒田を作っていこうという夢を持った人たちが少しでも増えていかないとうまく進んでいかないのではないか。今回の議論を聞いていてもまだ全てが順調に回っていないので。先ほど会長が、もっと学校の中に入っていかなければとおっしゃったが、美術館でも企画をしているが、学校との連携は難しい。そして、これまでの実績に自己満足している部分もあった。地域のニーズや課題、問題意識を持っている人たちを把握しきれていないように思われ、職員には業務が多くなり申し訳ないが、もっと外に出て、地域の人々の意見を聞く努力がもう少し必要ではないかなと思う。

委員

大変勉強になった。プラットホームという言葉があったが、やはり全体を見渡して色んなことをコーディネートする立場は大事だなと。自分の仕事の中にも生かせるなど感じた。アウトリーチで学校側の理解が少ないという意見があったので、校長会でもなぜそうだったのかを引き出しながら次に生かせるようにしていきたい。自分ももっと面白がって広げていきたいと思う。

委員

推進計画基本条例等が1年でできたことは素晴らしく、職員の頑張りだと思う。今年度の事業はかなりたくさんあったが、なぜ職員たちがこんなにも苦労しなければならないのか。肉体的な労働力にしても、チラシ1枚にしても、PRにしても、かわいそうなくらいだと実感した。人材の面では職員スタッフを増やさなければいけないだろうし、他課と違い文化芸術は難しく、勉強しないといけない。経済政策の次に文化芸術行政が大事なので、進化するためにはブレーンが必要だと強く思った。これからは開けてくるという希望を持っている。

委員

職員はこの一年非常に頑張っていて少し疲弊しているように見えて、パンクしてしまうのではないかと心配している。酒田という土地柄は、新しい事を受け入れるのは早いですが、間もなく飽きてしまう。先見の明があり、ぐんぐん先んじて行うエネルギーを持っている一方、それを継続、発酵、発展させる、良い意味での執念深さに欠けがちなのが残念な所。ところが今の社会教育文化課はその強いエネルギーと共に、本来酒田人の苦手な粘り強さをも併せ持って取り組みを続けている。このことに深く敬意を表したい。体を壊さないよう是非頑張り継続していただき、そのための皆さんの様々なサポートも是非お願いしたい。

委員

文部科学省が2040年まで国立大学に定員30%減を目指せと言い出したが、個人的には良いこととは思っていない。「ソサエティ5.0を目指す」と。これは元々科学技術基本法に基づいて、国が言い出したこと。ソサエティ5.0とは、1 狩猟社会 2 農耕社会 3 工業社会 4 情報社会で、5.0 はどうなるかというところ。ご存じの通りAIが中心となる社会になって創造社会と経団連は言い換えている。経団連に限らず最近ものすごく企業から芸術大学と一緒にやりましょう、感性を勉強させてくださいというラブコールが増えている。かなりの職業がやがてAIにとって代わって、残る職業はクリエイティブな、何が起こるかかわからず、計算できない、あるいは非常に個人的な何かだったりするため、芸術はこれから必要なので定員減はしませんと言う準備をしている。ソサエティ5.0を幸せに生きるためには文化や芸術が非常に重要。だからこれまでの価値観でやっていくとどんどん沈んで行ってしまう。それと、風が吹けば桶屋が儲かる的な話になって恐縮だが、多くの地方都市で抱えている問題が人口問題や経済問題として表れているが、自分の立場で考えてみると古い文化を守る人たちは、その土地に残ることを積極的に考えられたが、新しい文化に触れたい人達は全部出て行った。1回出るのはいいが、戻ってくる場所がなかったということが日本の地方都市が抱えている様々な問題のひとつの根っ

子になっている気がする。これから登用される専門人材は、一生酒田にいなくてもよいが、10年単位くらいでいてもらい、また他の土地に行くことで他の土地と繋がりができるようになる。先ほども言ったように、最近世界が小さくなって人が移動して交流することがとても増えている。取り残されると益々沈下していくのだろうと思う。

委員

この審議会が「推進審議会」という名称なので年度で区切って議論ができるというこの姿は多分酒田市としては画期的なものではないかと思っている。今までは審議して終わり、計画を作って終わってまた5年10年後というのが多かった。そういう意味で社会教育文化課は遠慮せずにどんどん協働の改革をしてほしい。こういった趣旨の審議会があればこそ継続してチェックしていただける、この有難さを感じてほしい。アート展のチラシは字が小さいし漢字にふりがながふられていない。誰が見るのかと考えたときに、社会包摂といった点からどうなのか。このスペースにこれだけの情報を入れ込むとすればやむを得ないと思うが、今はふりがなをふるのが当たり前。作成の過程では十分注意したほうが良いと思う。また、色覚の障がいがある方にとってこの色使いが良いのかということをお次回以降考えていただきたい。

委員

しっかりと説明を受けないと文章が行政的で抽象的で、理解をするのにかなり時間がかかると思った。我々は市民の皆さんに対して影響力を与えるために、もしくは市民の皆さんの生活が文化芸術を通じて少しでも良くなるためにここに集まっていると思うので、その結果が出ないとあまり意味がないと思う。その結果を出すために職員の皆さんは一生懸命働いてくださっているという議論にもなった。民間ではやったことには結果が出てほしいので、市民の皆さんに「最近希望ホールもやっていることが変わってきたんじゃない?」「色んなところに行くと色んなことをしているよね」、そういうふうに言われたいものだなと思う。そのことが結果として表れるということだと思うので、具体的な実感が市民の皆さんに出てくると良い。前はその逆で一部の人がやっておられた。それを結構な力技で変えた。少しでも多くの市民の皆さんが喜んでいような、巻き込まれているというような、結果的にそういう姿となるようにこの答申書があると思っている。財団の話は、2つの財団の背景があまりにも違いすぎるので一緒にして大丈夫かと思うところはある。酒田市の大きな文化行政を中長期的に面倒を見るような組織を作るのであれば、それこそ市原氏を理事長や会長にするくらいの覚悟がないとやったということにはならないと思う。

委員

今日のお昼に友人5人と食事をし、「この頃希望ホール変わったよね」と言われた。しかし、その後「新日本フィル来なくなったよね」と言われてズキッとした。「時々わけのわからないものをするよね」とも言われた。アートマルシェのことのようで、変わったことを感じるかと聞いたら、感じるかと答えた。アンケートで子どもから30代、40代の一番来てほしい人たちが来られないという結果が出たのでそういう人たちが集まれる場にしたいねと話をした。アートマルシェには日頃来られない子どもたちが家族連れでたくさん来てくれたこと、市民にとって親しまれる文化の拠点のようなホールにしたいなと思っていること、色んな人に幅広く様々な文化芸術に触れてもらいたいという気持ちが込められていることを伝えた。「訳の分からないことをしている」といつも言われるがそれで良い。アートマルシェ＝訳が分からないことで良いのである。ただみんな知らないので広報の裏表紙一面使ってPRしたらもっと認知してくれるのではないかな。もっと周知されて関心を持ってもらい、昨年来られなかった人からも来てもらうことで、市民の身近な日常生活に入り込んでいくのではないかな。それが色んな活力を生み出し産業を生み出すことになればすごく嬉しい。希望ホールがこの頃変わったと言われたことは変化の兆しだと思うので、良い方向に結び付けていくことが大事だと思う。

委員

イノベーションについて勉強していて、シュンペーターという経済学者がイノベーションということを言い出した。その中でイノベーションは既存知と新しい知識ではなく、既存の知識と既存の知識の融合であると言っている。それはできるだけ遠い方が良いと。つまり先ほど委員がおっしゃったが今までの1～4があってAIが出てきた。なぜ経済界が注目しているかというと、AIには感性がないから。シュンペーターの知識の遠いところと遠いところの融合を皆注目している。会長、委員方が審議会委員としていらっしゃるうちに、つまり酒田市の外なる既存知とその他の審議会委員や事務局の方々つまり酒田市の内なる既存知の融合で、総合的な文化芸術行政を考え続ける機構や統合する文化芸術事業がつくられることを期待する。

会長

気が付いたことがいくつかある。1 つは、「物の豊かさから心の豊かさへ」という言葉を今後使うのをやめないうこと。物のゆとりから心のゆとりも同じ。逆に言うとゆとりがないからやめましょうということになる。ところが、どの時代にもゆとりなんてなかった。15 億円持っている人でも金がないと言い、たくさん仕事を抱えている人でもまだ仕事がないと言う。不足を言い立てるのは人間の悪い本性であり、それを言っていたらどの自治体も文化行政に支援しない。高齢者福祉や病院に使おうという流れに負けてしまう。ゆとりがあるから芸術に触りたいのではなく、ゆとりがないから触りたいのである。辛く悲しいことがあるから明るい演劇を見たいのである。行政で使うのもやめてもらいたい。仮に議会や政治筋からこの言葉が出されることがあれば、ゆとりがあるからするものではないのだときちんとした反論をしてほしい。

そして芸術に触れる権利は人権であるということ。私たちはリベラルアーツという大学科目の大事さを知っている。この前ノーベル賞獲られた方も同じだが、リベラルアーツを学んだからあのような発想を持っているのである。純粋な工業学校や工業専門学校を出た人で辛いと言う人はきちんとリベラルアーツを学んでいない。応用科学では負けないが基礎科学的な発想に関しては辛いと聞いたことがある。そういう人文的な素養が絶対に大事になるということを伝えてほしい。

それからもうひとつ、委員がおっしゃった文化の保守とは何か。人間が価値を感じるものは全部文化であり、文化とは価値の体系である。ただその価値は生き死にや経済的なものに関して感じる私たちの価値の体系でもあるが、実は何が正しくて何が間違いか、何が美しく何が醜いか、何が真実で何が嘘かということの真実、善、美すべてが価値なのである。この体系が文化である。特に美、真実の体系は学問の対象。日本は非宗教国家のため、倫理の体系の宗教学習は必須科目ではないので家庭教育に委ねられている。でも真実の教育は行っている。美の教育も弱いが行っている。それをきちんとやらなければいけないと国際的な常識になっているのに、それをおろそかにしてきた日本は今どういう地位にあるかというと、OECD加盟国の中で一人当たりのGDPが最下位。映画産業に関してはどうも韓国に抜かれている。アニメ産業は中国に抜かれ始めている。得手の部分全部真似されている。なぜ抜かれるのかといえば後継者が育たないから。その職に就いて、誇りをもって全うできるという展望が出来ない国である。特にアートの世界は非常にリスクになっている。そこで身を立てていこうという青少年たちが現れなければこの国は成り立たないと思っている。そういう危機意識で頑張っているつもり。暇と金と体力と家族に恵まれた人だけが楽しめる文化ホールでは反感の対象になるしかない。だからこそ貧しい人、健康を害している人、家族に恵まれていない人、孤立している人をもっと包摂するような能動的な劇場経営をしてほしい。そういうことを生涯学習の体系に組み立ててほしいと思っている。

先ほどシュンペーターの話が出たので感動している。私が心から尊敬している経済学者に宇沢弘文先生がいる。その経済学の中に社会的共通資本(Social Common Capital)という概念がある。その概念の中で、一番典型的に出てくるのが、「教育」「水道」「芸術」これらはすべて社会の共通の資本であって、民間の経営だけに委ねてはだめだと言っている。専門的な知識と技量を持った人たちが民間であってもきちん

とコントロールしなければならない部分。その中で水道が一番にきているが、フランスでは民営化されている。ただならぬ話である。芸術も一緒だと彼は言っている。芸術を民間に任せると大阪の吉本のようになる。アートを私物化しマーケットの論理に全部委ねた結果が今の大阪の吉本文化だと思っている。ましてや国会会議中の首相が舞台上がることを許すとは、大阪人の倫理観から見たら許せない話であり政治に屈辱を感じず屈従している。だからすべて民営化するととんでもないことになる。専門的な見識をもった組織や人材がアートの供給に関してきちんとコントロールしないとイケない。その物差しが私は文化計画、文化条例だと思う。今日の話は私にとって貴重な刺激になった。

委員がおっしゃったように、4.5あるいは第5次ラウンドに入りつつあるのに、入れないのならば国に任せず地方から突破しよう。国は先頭を行かず、まず地方で成功した後にそれに乗って補助金を出してくれる。そういう意味での実験台は今の酒田でできると思っている。

4. その他

(1) 今後のスケジュールについて

事務局

本日いただいた意見を反映させたいと、会長と事務局で相談し、最終的な答申を皆様に郵送し確認していただき連絡を賜りたい。答申の時期については皆様からの確認が取れてからとなるので 11/28 または 12/24 の教育委員会の予定で進めさせていただく。次回の審議会は来年2月を予定している。

教育長

本当に貴重な意見をいただき、私もありがたいなと心から思った。ぜひ市民の皆さんにもこういうことを話している場が酒田にあるということ届けられないかと思う。もうひとつは、研修がとても大事だとあったが、なぜこの事業をやるのか伝われば良いのかなど。今、来年度事業の予算を勝ち取ろうと必死だが、これからは少しずつ具体例で語るができるようになっていく。結局何をしたいのだと言われたときに、例えば若竹ミュージカルについて語るの面白さや可能性はたくさんあると思う。答申の原案は大体まとまったが、これを具体化していくために何ができるのか、設計図を考えながら聞いている。この規模の市の財政予算の中からどういうふうに組み立てていけば良いかというのは非常に重要なことだと思っている。いくら使ったから素晴らしいというもので測っているものではないので、そこを単に予算の身の丈にしたいくない。大阪も京都も同じような方針を持ち、それで酒田はどうするのか、条例を作って何をしようとしているのかと友人から言われる。身の丈に合ったことをしなさいという意味なのかもしれない。でもやる価値というのは、身の丈と予算の部分とをしっかりと考えていかないとイケない。これから何をやるかというときはそこから始まるのだと思う。何に価値があり、どれ位の規模でできるかということに対してしっかりご意見をいただきながら進みたいと思っている。

5. 閉会

【以上】